

# 宮 波 籬

都市に埋もれた幻の古代宮殿



公益財団法人 大阪市博物館協会  
大阪文化財研究所

## 幻の難波宮を求めて

難波宮の名は、文献史料にはしばしば登場しますが、その所在地はわからず、幻の宮と言われていました。大阪市立大学を退職した山根徳太郎博士は、法円坂にあった旧陸軍の施設や住宅建設現場で古代の瓦が発見されることから、難波宮はこの地にあったと考えました。この仮説を実証するため、1954年に最初の発掘調査が行われてから60年以上が経過し、数百件もの発掘調査が行われてきました。その結果、今日、この地に難波宮があったことを疑う人はもういません。宮殿の遺構は二時期のものが同じ場所に重複しており、古い方が前期難波宮(7世紀)、新しい方が後期難波宮(8世紀)と呼ばれています。



置塩章氏(左)は1913年城南町(当時)で古代瓦を採集しました。  
山根博士(右)は置塩氏から大きな影響を受けました。

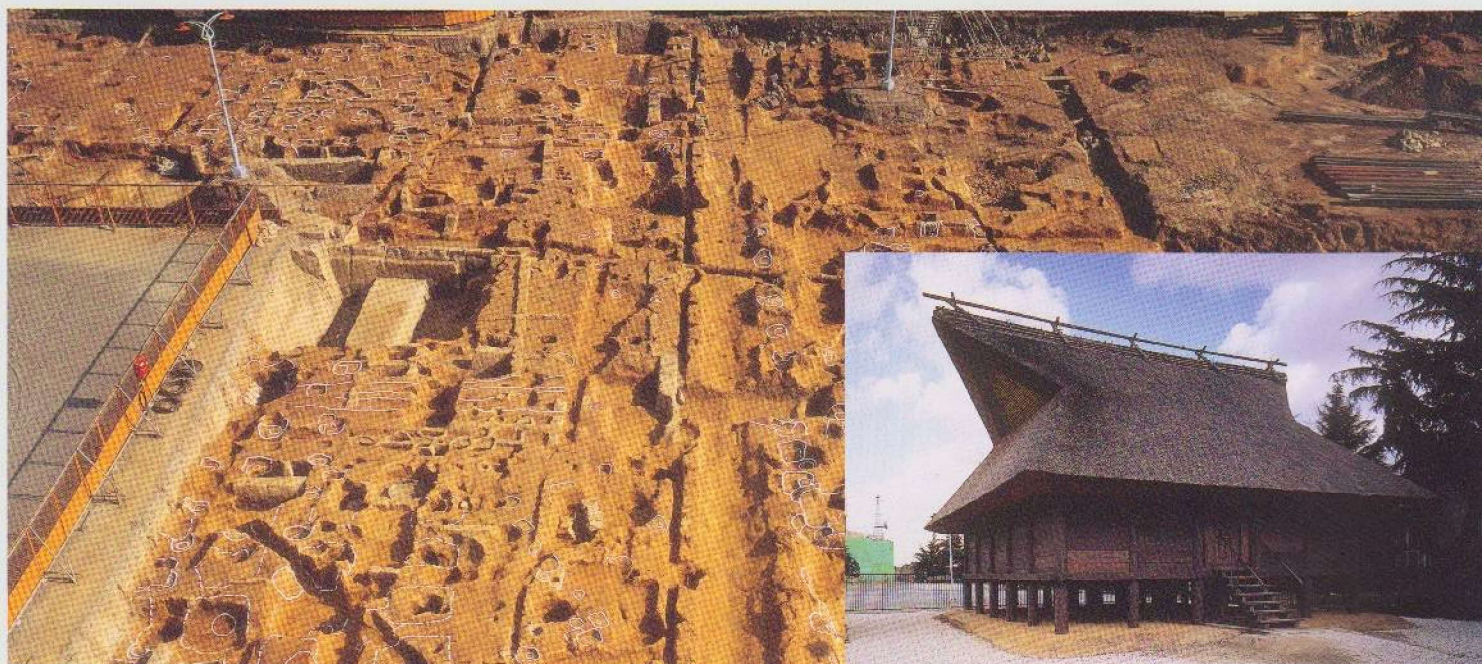


1953年法円坂住宅建設中に発見された鴟尾(しび)片。  
難波宮発掘の直接の契機となりました。

## 難波宮以前

5世紀後半には、規則正しく配置された16棟の倉庫群が建てられていました(法円坂遺跡)。倉庫の近くには大王の宮殿があってもおかしくはありません。これは巨大な百舌鳥・古市古墳群を残した倭王権に係る施設と考えてよいでしょう。

6～7世紀、大川周辺にあったとされる難波津は朝鮮半島や中国との交通・交易の要衝で、国家的な港として栄えました。周辺には「難波大郡(なにわおごおり)・小郡(おごおり)」や「難波館(なにわのむろつみ)」、「三韓館」などの役所や外交関係の施設、豪族の宅なども置かれており、法円坂の難波宮の下層から発見される遺構もこれらに関連するものとみられます。

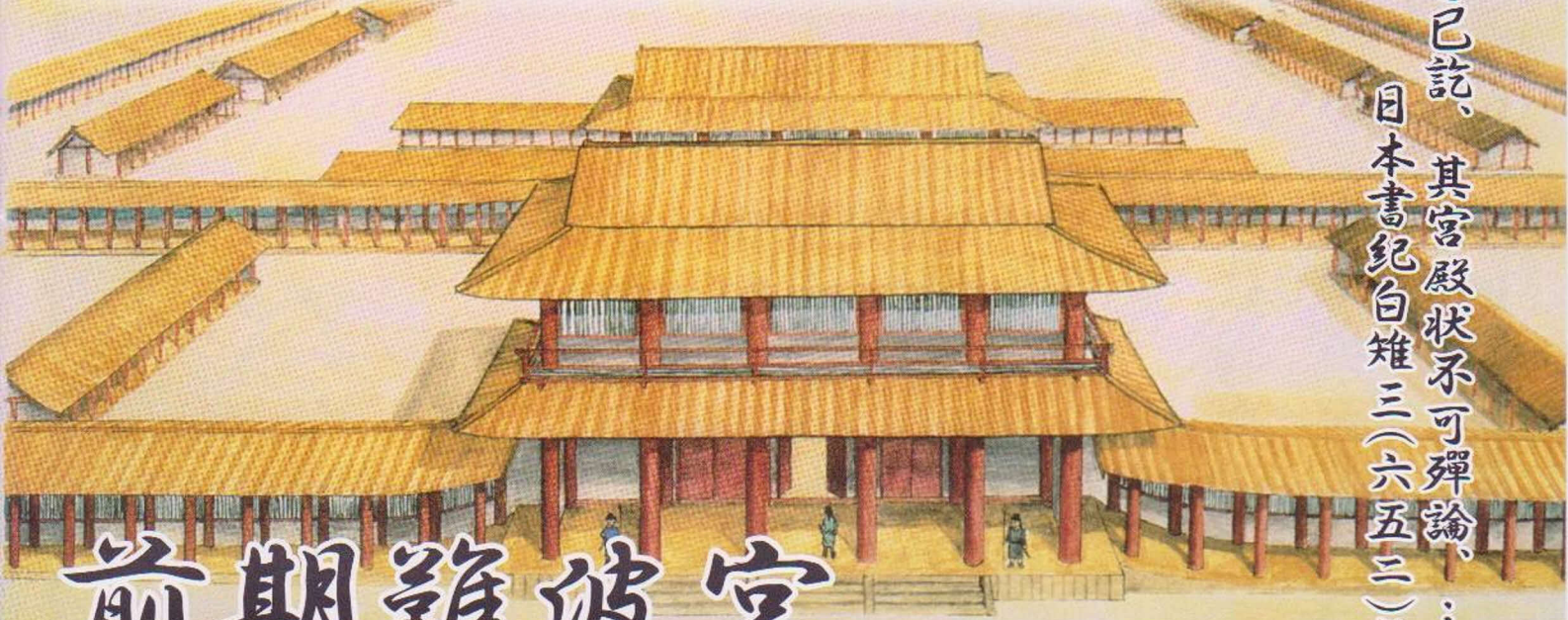


発掘された5世紀の倉庫群(大阪歴史博物館地域:1987年)とその復元(右)

645（大化元）年、乙巳の変によって蘇我本宗家は滅ぼされ、天皇中心の新しい政治体制がスタートします（大化改新）。即位した孝徳天皇は、新政の舞台として難波に遷都します。難波は外交や交通の要衝であり、かつ、豪族たちの影響の濃い飛鳥に比べてしがらみのない土地を選んだのでしょう。孝徳は小郡宮（おごおりのみや）・大郡宮（おおごおりのみや）・味経宮（あじふのみや）などを点々とした後、652年、難波長柄豊碇宮（なにわながらとよさきのみや）を完成させます。日本書紀に「其宮殿之状不可殫論（その宮殿のようすは語り尽くせないほど立派）」であったとされており、天皇の居所と政府機能を合体した巨大な構造をもっていました。前期難波宮こそがこの宮殿の遺構であると考えられています。

前期難波宮の建築は、掘立柱が用いられ、瓦が出土しないことから板葺（ないし茅葺）であったと考えられています。686（朱鳥元）年、威容を誇った宮殿は「大蔵省」からの出火で大部分が焼失してしまいます。

「秋九月、造宮已訖、其宮殿状不可殫論、……」  
日本書紀白雉三（六五三）年



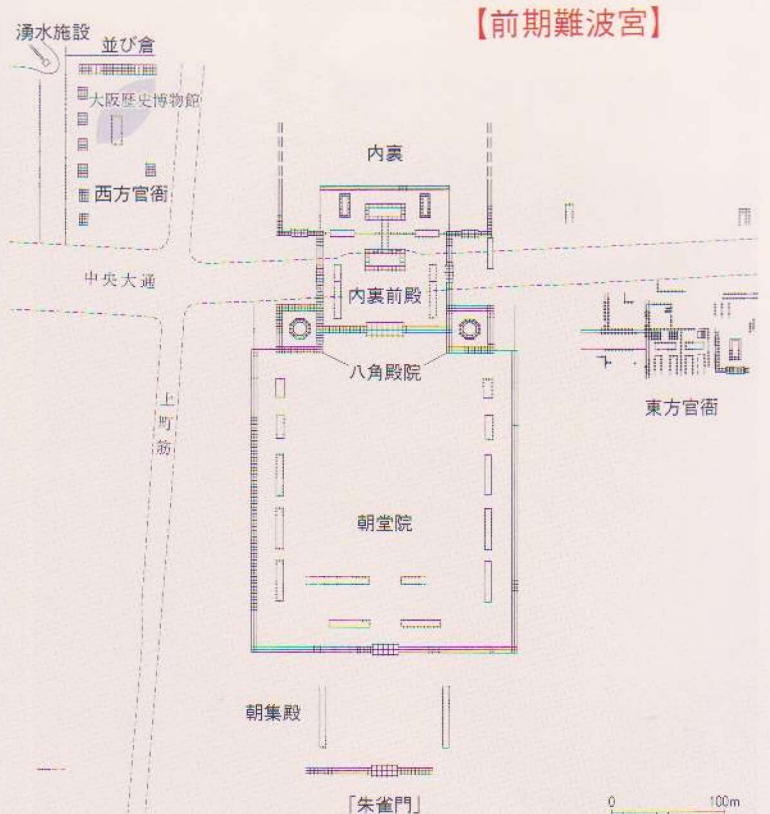
# 前期難波宮

## 前期難波宮の構造

内裏（だいり）は天皇の生活空間ですが、その南側は朝堂院（ちょうどういん）に接するように張り出していて、中央に大規模な正殿（内裏前殿）が建てられていました。この建物は宮中最大で、重要な儀礼や政務があるときに天皇がこの建物に入ったのでしょう。軒廊（こんろう；通路状の建物）に連結されて、北側にも大きな建物があります。内裏は回廊で囲まれ、その南には他の宮殿も含めて最大規模の門が朝堂院に向けて開いていました。この東西には八角殿が建てられており、内裏の荘重な雰囲気を出しています。

朝堂院には14（16の可能性もあり）棟の朝堂が建てられ、高級官僚が執務したとみられます。朝堂の間は広い中庭（朝庭）になっていて、役人が整列して儀式などを行った場と考えられます。朝堂院も回廊によって囲まれ、南には門が開いていました。その南には宮全体の正門「朱雀門（すざくもん）」がみつかっています。

内裏や朝堂院の外側は曹司（そうし）と呼ばれる実務的な官衙（役所）が置かれたエリアで、西方は倉庫を中心とした建物群、東方では小区画内にコンパクトに建物をおさめた建物群や倉庫群がみつかっています。



【前期難波宮】

## 「朱雀門」

宮殿全体の正門で、幅は5間(23.5m)、奥行は2間(8.8m)です。幅5間の門は五間門と呼ばれ、最高の格式をもつ門と考えられており、平城宮など他の宮殿でも重要な門はこの形式で建てられています。門の左右に回廊が取りつく翼廊と呼ばれる形式になります。この門より中は宮、外は京で、藤原・平城京のように、この門から南下する大路があればそれは朱雀大路ということになります。「朱雀門」の名称は藤原宮以後に使われますが、宮殿正門としての役割は同じでしょう。



発掘中の「朱雀門」(大阪市立聴覚特別支援学校内：1993年)

## 八角殿

内裏の東西に一箇所ずつ、回廊に囲まれて八角形の建物が建っていました。建物は重層の高殿と考えられ、用途は不明ですが、仏堂、鐘楼、鼓楼などの説があります。宮殿内に八角形建物が見つかったのは前期難波宮が唯一です。



東第4堂は長さ35.4mの長大な建物(1999年)



東八角殿院の発掘 右奥に八角殿、左手には回廊、遠方には西八角殿の赤い遺構表示が見える(1988年)。

## 朝堂

細長い建物は古代の役所に特徴的なもので、前期難波宮では14堂が確認されています。朝堂院南西・南東の隅に空閑地があるので、ここにもう一棟ずつあって16堂になる可能性があります。最も北にある東・西第1堂は幅5間(16.1m)、奥行3間(7.9m)で、柱穴が他の朝堂より大きく、重要な役所の建物であったのかもしれませんが。

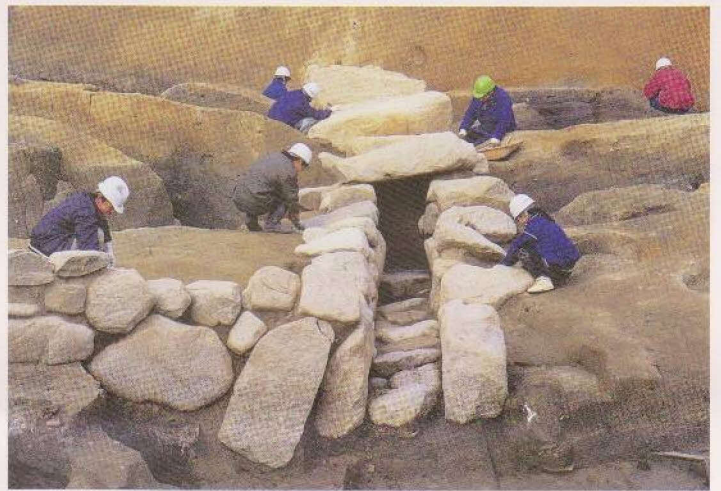
後代の宮殿の朝堂の数は、藤原宮・平城宮(第2次朝堂院)で12堂となります。こうした朝堂や官衙の配置は官僚機構の整備と関係すると考えられています。



西方官衙で発掘された並び倉(1988年)

## 湧水施設

西方官衙の北西隅には、谷の最奥部の湧水点を利用した水溜め遺構が発見されました。巨石を組んで水溜めと導水溝を作っており、北西方向へ水を流したようです。生活用水・防火用水を確保するためのものでしょう。



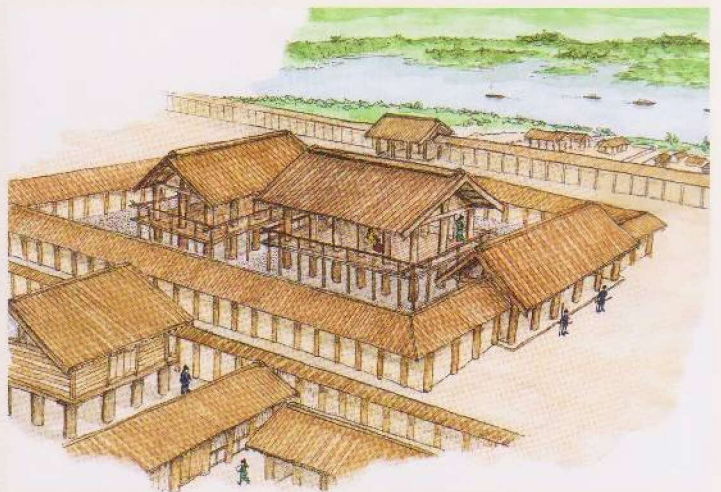
西方官衙湧水施設の石組導水遺構(1997年)



東方官衙東側の施設(2006年)と復元図(右上)

## 西方官衙

内裏・朝堂院の周囲には曹司が設けられていました。内裏の西には倉が建ち並び一画が発掘されています。倉の中には3~4棟の倉庫を連結した並び倉と呼ばれる大規模な形式のものもあります。宮殿で用いる物資や、穀物、武器などが納められていたのではないのでしょうか。文献には686年に「難波大蔵省失火、宮室悉焚(大蔵省が火元で宮殿が全焼した)」とあり、この辺りが大蔵省であった可能性もあります。



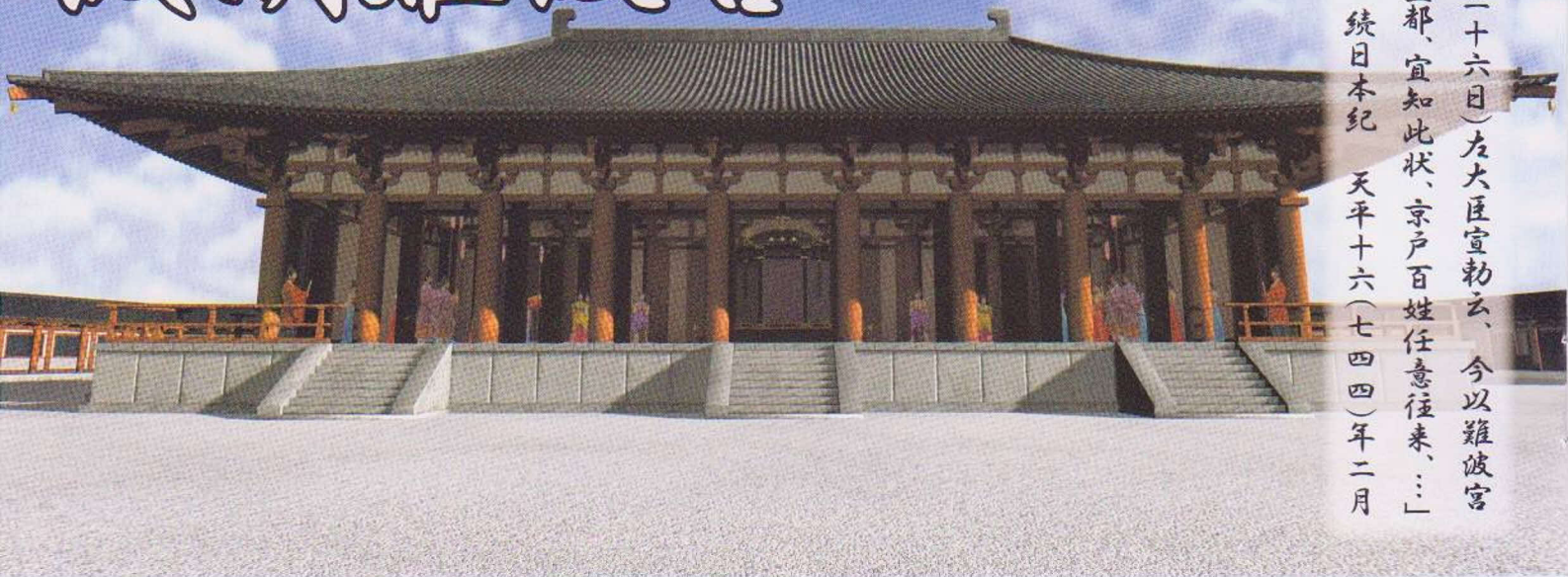
## 東方官衙

内裏の東側には小区画内に整然と建物が配された区画が複数見つかっています。これらはそれぞれが違う曹司に対応していたものと考えられます。しかし、その東側には五間門を伴う回廊を巡らせ、敷石で荘厳した一画が見つかっています。その格式の高さから天皇に係る施設とみられ、東方に向けた河内平野の眺望を楽しむ饗宴施設かとも考えられています。

# 後期難波宮

庚申(二十一日)左大臣宣勅云、今以難波宮  
定為皇都、宜知此狀、京戸百姓任意往來、...

続日本紀 天平十六(七四四)年二月

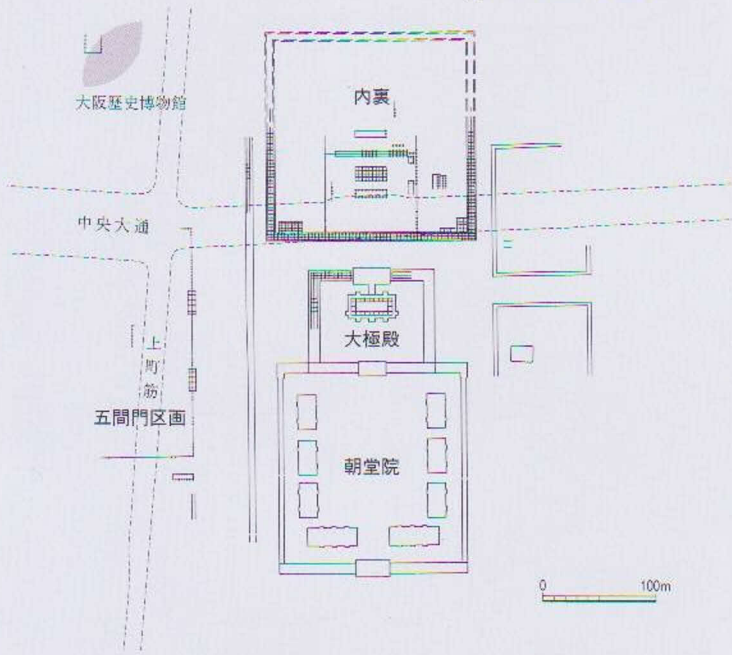


前期難波宮が焼亡したあとも、持統・文武天皇などが難波に行幸していることから、焼け残った建物はあったと考えられています。その後、奈良時代に、聖武天皇は首都平城宮に対する副都として難波宮を本格的に再興します。難波は大化改新の一環として造営されたことから、天皇中心の政治のシンボルのような存在であり、これを再興することは、聖武天皇にとって自らの皇位の正統性を強調する意味があったのではないのでしょうか。造営工事は726(神亀3)年から始まり、732(天平4)年頃にはほぼ完成したものとみられます。744(天平16)年には「以難波宮定為皇都(難波宮を皇都とする)」詔が出され、一時期ではありましたが難波が首都となったのです。しかし、その後、短期間のうちに都は紫香樂宮(しがらきのみや)へ移り、さらに平城宮へ還都しました。桓武天皇のときには長岡宮、平安宮へと還都され、難波宮は廃止されて、主要な建物は長岡宮へ移築されました。



発掘中の大極殿跡 左右に飛び出している部分は階段と軒廊の跡。その外側には玉石が敷き詰められていました(1970年)。

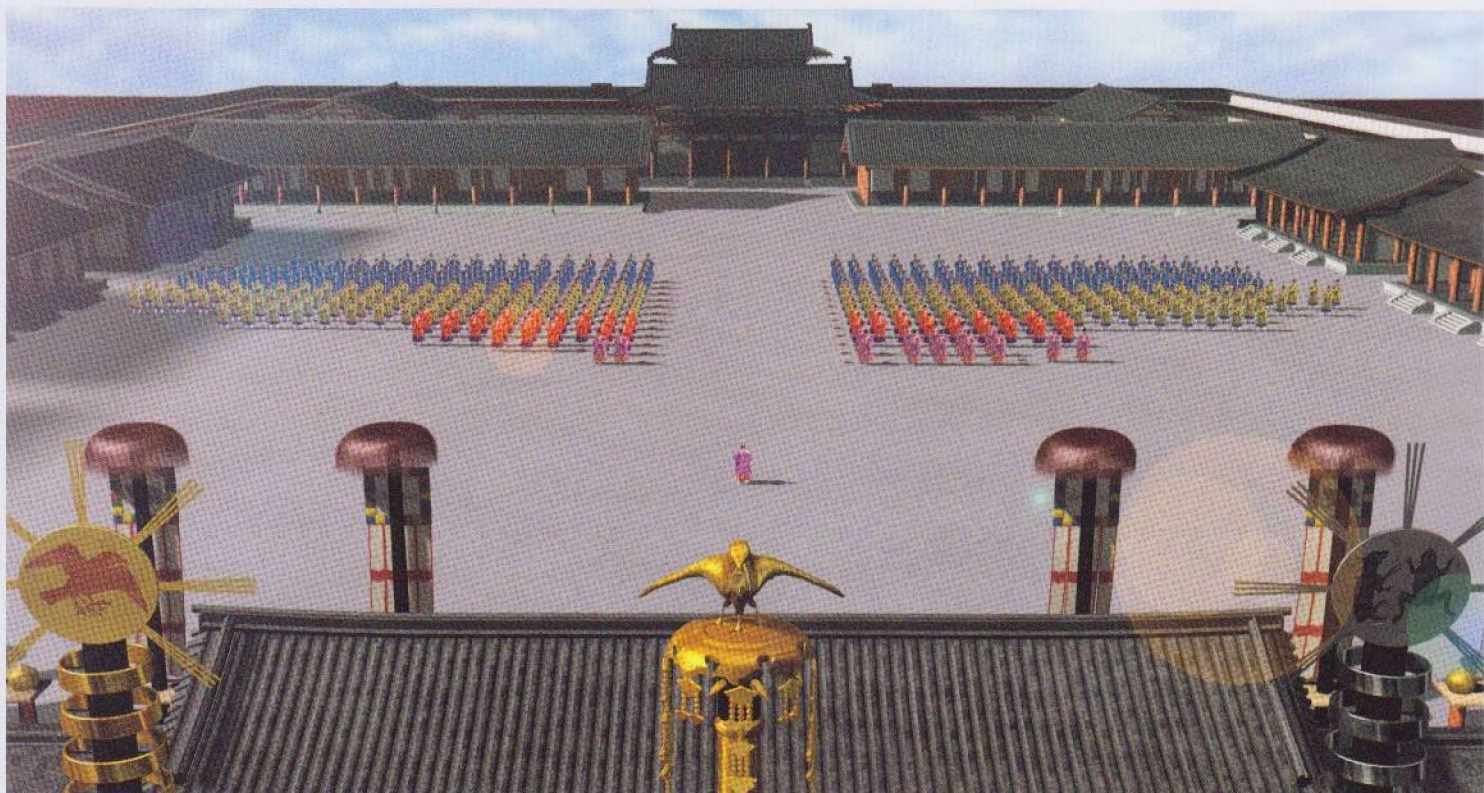
## 【後期難波宮】



五間門の発掘(1985年)

## 後期難波宮の構造

前期難波宮と違って、大極殿や朝堂院といった主要な建物は瓦葺で礎石を用いて建てられました。一方、内裏周辺は古式に則った掘立柱形式で板葺か茅葺で建てられました。内裏は朝堂院とは完全に分離し、朝堂院の北に接して大極殿が設けられました。朝堂は八堂となっています。朝堂院の西には五間門を二つ並べた区画があり(五間間区画)、内裏の東南にも石敷や築地塀を伴う区画が復元できます。いずれも格式の高いことから天皇に係るような施設の可能性があります。その反面、曹司が顕著でないことは副都ならではの特色であるのかもしれませんが。



朝庭のイメージ



前期難波宮建物の壁土(2010年)

## 壁土

東方官衙地域の東の谷からは、焼け落ちた前期難波宮の建物に用いられた壁土の塊が出土しました。白い土で上塗りしたものもあり、白く輝く壁をもった建物もあったことがわかります。



最古の万葉仮名文木簡(2006年)

## 万葉仮名文木簡

西方官衙の南の谷からは、前期難波宮造営時のものとみられる木簡が出土しました。木簡には、「皮留久佐乃皮斯米之刀斯」と書かれており、漢字一文字に日本語の一音をあてる万葉仮名で「はるくさのはじめのとし(春草のはじめの年)」と読めます。和歌の一部とみられ、万葉仮名を用いた最古の例です。

### 難波宮略年表

5世紀後半	上町台地に大型倉庫群が造られる(法円坂遺跡)
6～7世紀	難波に大郡・小郡や客館などが造られる
645年	大化改新で難波に都が移される
650年	孝徳天皇難波長柄豊碕宮を造りはじめる
652年	難波長柄豊碕宮が完成(前期難波宮)
678年	難波に羅城を築く
683年	天武天皇 複都制の詔 難波副都に
686年	難波大蔵から失火、難波宮消失
699年	持統上皇・文武天皇難波に行幸
726年	聖武天皇 難波宮の再建に着手(後期難波宮)
732年	再建工事が一段落か
744年	一時的に難波が都になる
756年	孝謙天皇難波に行幸、難波宮東南新宮に御する
784年	長岡京に遷都 難波宮の建物を移築する
793年	難波宮を廃し、摂津職を摂津国とする

### もっと知りたい難波宮

- 大阪歴史博物館  
10階より難波宮跡を一望。大極殿内部のほぼ実寸大復元のほか、難波宮に関する多角的な展示があります。  
開館時間：9：30～17：00（金曜は20：00まで）  
休館日：火曜日（祝祭日の場合翌日休館）  
年末年始（12月28日～1月4日）  
入館料：常設展 大人：600円 高大生：400円  
（中学生以下無料）  
問い合わせ：06-6946-5728
- 大阪文化財研究所難波宮調査事務所展示室  
難波宮をはじめ市内北部の遺跡出土品を展示。  
開館時間：9：00～16：30  
（有人対応；事前に要連絡）  
休館日：土日・祝祭日・  
年末年始（12月28日～1月4日）  
入館料：無料  
問い合わせ：06-6943-6836